校長室だより～燦燦～ №３１１

くれない族

2021.3.4

作家の曽野綾子さんがよく使われる言葉の一つに「くれない族」というものがある。曽野さんは、若者からお年寄りまで、日本中に数多くの「くれない族」がいることをとても憂慮されている。以下に曽野さんのお話を紹介する。

今の若者たちを見ながら「与えることを知らない」と思います。自分にできる小さなことであっても、与える習慣をつけることが人生を心豊かに生きる一つのヒントかもしれません。

私は以前から「くれない族」という言葉を使っていますが、それは若者に限った話ではありません。お年寄りにもそういう人はたくさんいます。友達が「してくれない」、配偶者が「してくれない」、政府が「してくれない」、ケースワーカーが「してくれない」、娘や息子が「してくれない」。こういう言葉を口にする人は、青年でも壮年でも精神的老化が進んでいると私は言っているんです。

同じような意味で、人間としての与える義務を果たすことも必要なんですね。そうでなくて受けてばかりいると、心が満たされないんでしょう。

インドに行ったとき、ガンジス川に面したヴァナラシで一人の日本人のお嬢さんとお会いしました。彼女は学校を出て数年間勤めて貯めたお金でインドを旅していました。安宿に泊まりながら２、３年旅を続けていると聞いて、私は感心したんですね。

それで、そこにいらしたイエズス会の神父様に彼女を紹介して、後で「神父様はどうお思いになりましたか」と聞いてみたんです。すると「私には少しも幸せには見えなかった」とおっしゃるんです。「どうしてでしょう。独立心もあって、自分のお金でインドを見に来た感心な人ですよ」と言ったら、「いや、あの人は自分のしたいことをしているだけで、与えるという一人前の人間としての義務を果たしていない」と言われる。

考えてみれば、インドという地は貧しい人が多くて皆が助け合わなくては生きていけない。だけど彼女は一人、自分のことだけを考えて行動していた。そのことをおっしゃっていたんですね。

「くれない族」うまいことをいうものである。確かに、世の中には「〇〇がしてくれない」と不平不満を言ったり、ぼやいたりしている人が多いように思う。ということは、「くれない族」の中から教員になっている方も少なからずいると考えるほうが妥当であろう。「くれない族」は教員になれないというのであれば別だが、そんなことはないであろう。

「くれない族」のことを理解していないと、まわりの人たちは、主体性がない、受け身だ、指示待ちだなどと思うのかもしれない。当たり前である。相手が自分に「してくれる」ことを待っているのだから、自分から動くわけがない。「くれない族」のことを個人の問題で片付けることはできない。小さいときから何でもやってもらえる環境で育ってしまえば、自然とそうなるであろう。

だが、そのままでいいわけではない。「くれない族」の若者を一人でも多く、族から引き離す必要がある。これも今の時代に必要となる人材育成の一つである。まずは、自分が「くれない族」にならないようにすることが先決である。